

2022年8月22日

沖縄戦の時、瑞慶覧長方・シゲさんはどうやって生き残ったのか

6年 組 番

名前

みなさん、引き続き、沖縄戦について考えましょう。いろいろな疑問がたくさん出てきましたか。この授業は、少しでもみなさんにたくさんのかをつくるのが目標です。みなさんと同じくらいの年に沖縄戦を体験された方が「どうやって生き残ったのか」一緒に考えてみましょう。瑞慶覧長方さんと、姉のシゲさんの話を読んでみましょう。

当時の学校教育

私が入学した頃の学校名は第二大里尋常高等小学校（現在の大里南小学校の前身）だったが、昭和16（1941）年頃に戦争が勃発してから校名が大里第二国民学校に変わった。教科書も「ススメ ススメ ヘイタイススメ」などの軍国主義的な内容だった。

校舎はボロボロだったが、「御真影（天皇・皇后の写真）」を安置する奉安殿は鉄筋コンクリートで頑丈に造られていた。登校するとまず「宮城遥拝」といって、皇居の方向を向いて最敬礼をした。方言も使うだけでスパイ扱いされたので、日本語（標準語）で話すよう徹底されていた。

日本人はみんな天皇の赤子（子ども）であり、敵であるアメリカとイギリスの鬼畜生（鬼畜米英）と戦うには一億一心（すべての日本人が団結すること）だ、ということが学校教育や国全体のスローガンになっていた。

陣地構築を手伝う

昭和19（1944）年に日本兵が学校を兵舎として使用するようになってからは、児童は学校を追い出されてムラヤー（公民館）で授業を受けた。

1、2時間くらいは授業をしたが、3時間目からは日本軍の軍作業の手伝いをさせられた。

高学年（5、6年生）は壕を掘る作業だった。この辺りの土壌はクチャ（粘土質の灰色の土）なので、幸い掘りやすかった。男子生徒がショベルやツルハシ（当時はジュウジと呼んでいた）で掘り、女子生徒はザルやモッコなどで土を運び出していた。作業は午後5時ごろまで続き、平川壕や湧稲国のあたりなど、いくつもの場所の壕を掘った。

日本兵との交流

昭和 20 年に入ると兵隊が増強され、銭又の公民館や民家にも兵隊が駐留するようになった。銭又では 8 軒の家が兵舎になり、私の家にも 8 人の通信兵がいた。軍国教育の影響で軍人に憧れていた私は、よく我が家の馬(3頭いた)に乗っていた。軍人の中で馬に乗れるのは大隊長ぐらいだったため、兵隊たちから「隊長さん」というあだ名をつけられた。

その時、姉のシゲさんは

3 月 1 日から 23 日までの間、わが家にずっといたのは三人の兵隊で、その中の一人に宮城県出身の遠藤さんという、当時 25 歳の優しい性格の幹部候補生がいた。

日本兵は昼間は壕掘りなどの作業を行っていたが、夜は自由だったようで各家庭に遊びに行っていた。私の家にも遊びに来ていて、変な歌を教えてくれるなどして楽しい時間を過ごした。3 月 23 日にアメリカ軍の攻撃が始まるまでは、このような生活をしていた。

日本兵に壕を追い出される

昭和 20 年 3 月 23 日、この日は学校の卒業式や修了式の日だったが、アメリカ軍からの爆撃が始まった。家に駐屯していた兵隊はこの日に家を出て行った。食料は芋や豆など、蓄えていたものを壕の中に持っていき、夜になると畑に行き芋を掘るなどして調達した。

5 月 23 日には私の家の壕に日本兵がやってきて、壕を出るように言った。困った母は「ここを出ても行く当てはないし、どこに行けばいいのかも分かりません。兵隊さん許してください。子どももいて、こんな状況の中で出て行っても終わりだから」と兵隊に言ったが、「軍の命令は天皇陛下の命令だ。天皇の命令に反する奴は国賊だ」と言われた。母は驚いて謝罪し、「出ていく準備をするから」と一晩だけ時間をもらった。壕を出たらいつどこで誰が死ぬかも分からないし、はぐれてしまう可能性もあるので、親が死んでも生きられるよう、一人一人のかばんと背囊(背中に負うかばん。リュックサック)に味噌、塩、黒砂糖、砂糖、芋や乾パン、鯖缶(非常に大事にしていた)などの食料とお金を入れ、防空頭巾をかぶり、翌日に壕を出た。

5 月 27 日は海軍記念日なので、日本軍の神風特攻隊が助けに来てくれると期待していた。だがそれどころではなく、アメリカ軍がどんどん大里村に侵攻してきていた。

ここまでの証言を読んで、瑞慶覧さんと日本兵の関係についてまとめてみよう。

まかべ こめす しけつ けつい 真壁・米須で自決を決意

6月16日頃の朝早い時間、豆腐を作るために豆を絞るときの「ギリギリギリギリ」という金属音のような音が聞こえた。壕の外を見ると、USAと書かれた緑色の戦車が停まっていた。出て行ってアメリカ兵に捕まるのは恥だと言われていたので、覚悟を決めて自決しようということになった。

合流した瑞慶覧チョウソウというおじさんは元防衛隊員で、防衛隊だった時に手榴弾を2つもっていた。手榴弾の使い方は当時学校でも教わっていて、一つは自決のため、もう一つは敵に投げるためのものだった。この壕にアメリカ軍が入ってきたら自決を決行しようとしたが、アメリカ軍は道の下に造っていた私たちの壕に気がつかなかったようで、壕の上を通り過ぎていった。

その時姉のシゲさんは

みんな手榴弾を持っていて、「どうせ死ぬから」ということで自決も考えたが、私の母親が必死に説得したこともあって事なきを得た。

にほんへい うば 日本兵に荷物を奪われる

大度で避難している途中、攻撃を受けて穴が空いた水タンクに隠れている日本兵がいた。手招きをされ、「いつも追い出されてばかりなのにありがたい」と思っ込んで入って行った。日本兵からは水ももらったので、お礼にかばんの中の食料を少し分けた。

6時頃になり、アメリカ兵が近くに来ているということで逃げようとしたが、持ち歩いてきたかばんが無くなっていることに気が付いた。「兵隊さん、僕のかばんは？」と聞くと「誰がそんなの分かるか！」と言われた。本当は助けるために呼んだのではなく、かばんの中身が欲しかっただけなのだとのとき分かった。

とうこう よ ぎゃくきつ 投降を呼びかけた人の虐殺

6月20日は朝から攻撃が全く無かった。約三カ月の間、このようなことはなかったの
で「おかしいな、どうしたんだろう」と思っていた。ギーザバンタには追い詰められた避難
民がたくさん来ていた。朝6時半頃、現在の平和祈念堂の奥の丘には、暑かったので上半身
裸のアメリカ兵が百人ほど並んでいるのも見えた。

するとアメリカ軍がいるところから、ふんどし姿で白旗を持った30代くらいの沖縄の
おじさんが一人、こちらに向かってやってきた。白旗は降参旗ということなので、みんなが
怪訝そうに彼を見ていた。彼は「私はアメリカ軍の捕虜になって、今収容所に入っている。
皆さんを助けるためにこの旗を持ってきた。男はふんどしで、女は着物だけで良い。収容所
では食料も衣類も配給する。私がこの旗を持って案内するから、安心してついてきて下
さい」と言った。すると、岩陰から日本刀を持った日本兵が出てきて、「売国奴！スパイ

野郎！」と怒鳴りながらこの人の首を斬り、虐殺してしまっただ。毎日何万という死体を見てはいたが、生きた人間が生きた人間の首を斬るといふ、こんなに恐ろしいことはなく、言葉も出なかった。女性たちはプルプル震えていた。殺された男性の言うことを聞いて逃げようとした人もいたが、日本兵が追いかけて斬ってしまった。

姉のシゲさんの話

日本兵が出てきて、「こんな馬鹿がいるから沖縄は戦争に負ける」といふ、ふんどし姿の人の首を斬ってしまった。この様子を見ていた避難民は右往左往していた。

ふんどし姿の人の言うことを聞こうと、穿いていたズボンを脱ごうとしたおじさんがいたが、「ここでズボンを脱ごうとしている馬鹿がいるね」といわれ、すぐに穿きなおしていた。

当時、その場所は死体の山になっていた。死体のお腹は膨れて悪臭もすごかったため、ヨモギの葉を鼻に入れて避難していた。私はけがで足が痛いし、そこで死ぬつもりでいた。しかし母は私に「歩け」といふ、私が「どうせ死ぬんでしょ」といふと、「あんたが死んだら(私も)ここで死ぬよ。やなわらばーが。生きても死んでもね、お墓でも一緒だよ。あんた一人死んで、どうやって生きるか」といわれた。

アメリカ兵はこの様子を双眼鏡で見えていたが、助けようがないと思つたのか、機関銃や火炎放射器などで攻撃してきた。私たちは諦めてギーザバンタの絶壁を降り、海岸の岩の間に隠れた。戦後に子どもや孫たちをその場所に連れて行つたが、どのようにしてあんな絶壁を降りていったのかわからない。とにかく「火炎放射器で焼かれるよりは」といふ思いだった。人間は追いつめられるとすごい力が出るものだといまだに思ふ。

投降の呼びかけと海岸で出会つた日本兵

海岸では水は豊富だったが食べ物がないので、アメリカ軍が捨てた期限切れの食べ物やしモンの皮、パンの耳などを拾って食べていた。

ところが2、3日経つと、陸は野戦ジープ、海は上陸用舟艇から毎日朝昼晩、「出てこーい、出てこーい。心配なーい」と優しい声で投降を呼びかけるアナウンスが聞こえるようになった。初めは「絶対出るまい」と思っていた。しかし3日目くらいからは空腹に耐えられなくなり、皇民化教育で洗脳された自分と、「生きたい」「食べたい」といふ人間の本能の葛藤が始まった。何も食べていないので一週間目くらいからは幻覚も見るようになった。

その時、姉のシゲさんは…

その後、沖縄の女性の着物を羽織つた日本兵に出あい、彼は私の母に「おばさん、アメリカ軍は住民を殺さないから、捕虜になりましょう」といふた。このときアメリカ兵は宣伝ビラを飛行機からばら撒き、手を挙げて海岸に出るよう、マイクでアナウンスしていた。この日本兵は、ハワイの人から密かに情報を聞いたということだった。

沖縄戦の時、瑞慶覧長方・シゲさんはどうやって生き残ったのか

6年組番

名前 _____

考えてみよう：もしあなたが、長方さん、シゲさんだったら

瑞慶覧さん一家は、海岸で追いつめられています。長方さんは「皇民化教育で洗脳された自分と、『生きたい』『食べたい』という人間の本能の葛藤^{かつとう}」をしています。シゲさんは、母が「沖縄の女性の着物を羽織^{は お}った日本兵に出あい、彼は私の母に『おばさん、アメリカ軍は住民を殺さないから、捕虜^{ほりよ}になりましょう』とされているのを聞いています。アメリカ軍は、毎日やさしい声で投降^{とうこう}を呼びかけています。

もし、あなたが、長方さん、シゲさんだったら、どうしますか？

- ① アメリカ軍の捕虜になる
- ② アメリカ軍の捕虜にならない
- ③ その他（ _____ ）

その理由

今日の授業をうけて、疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことを書きましょう。

【その後どうなったか】

長方さんのその後

誰かが「出てみようか」と方言で提案し、^{とうこう}投降を決めた。

岩の間から出て、最初に会ったのは日系二世のアメリカ兵だった。顔立ちが自分たちと似ているので、「兵隊さんも捕虜ほりよになったんですか？」と聞いてしまった。次に黒人兵が出てきて私たちは連れていかれた。^{しゅうてい}舟艇の中には白人兵がいた。

そこでは私と同じくらいの年頃の少年がけがの治療を受けていた。崖で足にできた小さな傷が、一週間ほど経つと大きな傷きずとなって膿うみを持ち、ウジ虫も湧いて壊死えししかかっていた。そのウジ虫をピンセットで取りながら治療ちりょうしていて、「アメリカ兵は話に聞いていたような人たちではないな」と思った。

^{しゅうようじょ}収容所での生活

^{しゅうてい}舟艇は具志頭村 ^{みなとがわ}港川、^{ながも}長毛（現八重瀬町）に到着した。^{とうちやく}舟艇を降りるとアメリカ兵から水をもらった。カルキで消毒しょうどくされた水だったようだが、それまで井戸水しか飲んだことがなかったので、毒殺どくさつされると思ってみんな吐き出した。そこからトラックで玉城村當山の仮収容所へ連れて行かれた。そこでは野戦用やせんようのレーションの配給はいきゅうがあり、チーズやバター、チョコレート、ビスケットなどがセットになって入っていた。チーズは食べたことも見たことも無かったので、「腐くさったものを！」と思い、またアメリカ兵のことを疑ってしまった。

當山では軍人と民間人が分けられ、そのまま一泊した。日本兵の中には沖縄の人の着物に着替えて民間人になりすましている人もいたが、そこではばれていた。逆に、学校の体育の先生くんれんや訓練の先生が軍人だと間違われることもあった。大里第二国民学校の高学年の先生だった辺士名チョウコウ先生はとても規律正しい方で、軍人に間違われて百名収容所へ連れていかれた。しかし私の同級生五、六人で、アメリカ兵に「この人は僕たちの学校の先生で兵隊じゃなかった、早く出して」と二回ほど言いに行き、釈放しゃくほうされた。

當山からは徒歩で玉城村百名まで移動した。本来なら知念方面に行くことになっていたが、百名には知り合いや字の人がたくさんいたので、玉城村百名に入ることになった。百名ではギボさんという人の屋敷の敷地内に住まわせてもらった。そこには二〇世帯ほどいたと思う。私たちは後から捕虜になり、アメリカ軍からの支給も不十分だったため、段ボールや板切れなどを使い、仮小屋ともいえないものだったが、住みかを造った。

学校は青空教室で、収容所の中から戦前に教員をしていた人を集めて教育が始まった。午前中は授業を受け、午後は同級生を集めて越境えつきょうし、食料を探しに行った。玉城村志堅原にあったアメリカ軍の兵舎から食べ物ももらったこともある。与那原には台風で難破なんぱしたアメ

リカ軍の船があり、海底に潜^{もく}って卵や缶詰、毛布などを戦果として持ち帰った。

シゲさんのその後

元々、捕虜^{ほりよ}になると女は強姦^{ごうかん}される、耳や鼻を切られると言われて洗脳^{せんのう}されていたが、日本兵の言うことを信じて出ていくことにした。そして、6月25日にギーザバンタ（現八重瀬町）で捕虜^{ほりよ}になった。

百名収容所へ

捕虜になってからは、見た目が日本人で日本語を話しているが、服装が日本兵でない兵隊がいてびっくりした。「僕はアメリカの兵隊だよ」と言っていた。白人も初めて見たが、青い目をしていて怖かった。『水を飲みなさい』と言われたが毒が入っているかもしれないと思って飲まなかった。黒人も見たが、唇だけが赤く、こちらも初めて見たので怖かった。

それから捕虜になった人たちは海岸に集められ、水陸両用戦車に乗せられた。「そのまま海に沈められる」と思って泣いている人もいた。しかし、到着したのは港川（現、八重瀬町）の海岸で、そこからトラックで玉城小学校近くのキャンプ（収容所）まで移動した。そこに一晩泊まり、煮物を食べさせてもらえた。

親戚とも再会し、翌日には徒歩で玉城村百名へ移動した。捕虜になることを進めてくれた日本兵も百名にいたが、彼は金網^{かなあみ}の中に入れられていた。戦後、この日本兵にあえないかと思って毎日新聞に投稿したが探し出せなかった。

百名ではおじさん達が造っていた仮小屋や、焼け残っていた民家（十七世帯が入っていた）に収容された。大きなガジュマルの下に茅^{かや}を敷いて寝たこともあった。住む場所がないので、みんな山の中に小屋を造っていた。

百名収容所には一カ月ほどいたと思う。第二人（長方、チョウシュン）は百名初等学校に通ったが、学校と言っても畑の中での青空教室だった。

百名には学校以外にも診療所や警察署があった。けがの治療はアメリカ軍の診療所で、濱松病院の医師が行っていた。

（瑞慶覧長方、仲程シゲ証言は、「南城市の沖縄戦 証言編一大里一」南城市教育委員会（2021）に掲載されている。P.183-P.202 を参照。）